

私と文学・06

森村誠一のこと

今年7月、作家森村誠一が亡くなった。享年90。作品のジャンルは多彩だ。最初に読んだのが推理小説『人間の証明』。半世紀も前だ。累積売上げ部数は、2021年現在で約770万部というから驚く。敗戦の焼け跡、米兵と日本人女性との間に産まれた私生児の悲劇。物語のキーワード「母さん僕の帽子どうしたでしょうね……」は西城八十の詩で、今も印象に強く残っている。

新境地を拓いた『悪魔の飽食』。第2次世界大戦中の関東軍細菌戦部隊(731部隊)を描いており、部隊の存在は知っていたものの、読んでいるうちに身の毛がよだつ思いがした。こちらもベストセラーになったが、写真の真偽など物議を醸し出し、森村は抗議、パッシングに遭ったりした。信ぴょう性の是非はともかく、

人間を狂気に駆り立てる戦争の何とおぞましいことか……不穏な時代の痕跡が刻まれている一冊だと思う。

そして時代小説。伊達騒動を描いた『虹の刺客』。伊達騒動に関する書物は多いが、基本的に本作は、山本周五郎の『樫の木は残った』の流れを汲み、原田甲斐は逆臣ではない。権謀術数を弄した権力闘争渦巻く中、想像という大きな器で人間を見つめ、独特の伊達騒動を作り上げている。時代小説の面白さを堪能でき、真実は事実と虚構の中間に宿す「虚実皮膜」という言葉が浮かんだものだ。

晩年、森村は老人性うつ病に罹った。そのときの体験を踏まえた『老いる意味』。近いうちに読んでみたい。(其田敏美)

「私と文学」の原稿募集  
約600字で会員のみなさまの原稿を募集します。文学館友の会事務局まで、お送りください。

文学館友の会、「りらく」で紹介

6月に行われた友の会講座「地図の上で文学散歩しよう」は、和やかな会だった。明治時代の仙台の地図を辿ることで、文学者がにわかに関心をもつて近づいたのを感じた。鳥崎藤村が吉岡方面へ行くのに仙台文学館正門前の現在の県道を通ったとの説明には、軽いざわめきがあった。

そんな和気あいあいの文学館友の会が雑誌りらく9月号の「仲間の輪」に2ページにわたって掲載された。当日の講座の様子は勿論、これまでの行事のなつかしい写真や、文学館内外の素敵な写真が沢山あり、友の会の活動が視覚的にもよくとらえられている。

会員はインタビューに、「ここに参加していればこそその愉しみがあるのでですよ」と応えている。(佐)

文学の杜 仙台文学館 友の会会報

第73号

令和5年11月30日発行

仙台文学館友の会(仙台文学館内)

〒981-0902

仙台市青葉区北根2丁目7の1

電話 022(271)3020

仙台文学館のホームページ

https://www.sendai-lit.jp/

企画展

「劇作家石川裕人 演劇に愛をこめて」

思い残し切符を探してみませんか

石川裕人(本名・裕仁)、1953年生まれ、名取市で育つ。2012年急逝、その59年の人生を劇作と演劇に捧げた。この企画展は、その生涯を本人のブログなどの抜粋によってたどり、紹介するものだ。

小学4年生の石川少年は、授業で書いた創作人形劇の台本を褒められた。高校1年生の冬、西公園で観たテント劇に衝撃を受け、初めての戯曲「死に神が背中を触った」を書き、友人と二人で高校の階段の踊り場で上演した。1973年高校を卒業し「意気揚々とドロップアウトを宣言」した。1976年に「劇団洪洋社」を旗揚げしたが、経済的負担も厳しく3年で解散した。だが、石川裕人はそこで止まらなかった。劇団を再結成し、発展させていった。個人としての活動の幅も広がっていった。それらは「せんだい演劇工房10BOX」の設置に繋がった。さらに児童劇団への脚本提供、シニア劇団の設立や指導に携わるなど多岐に及んだ。2011年3月11日東日本大震災が発生、その1ヶ月半後には「夢トラック劇場」を岩手・宮城の沿岸部で上演した。翌12年震災をテーマとした「方丈の海」を上演、千秋楽の約1ヶ月後に急逝した。石川裕人という人が、なぜこれほど劇作と演劇を愛し続けられたのか。その場



た創作人形劇の台本を褒められた。高校1年生の冬、西公園で観たテント劇に衝撃を受け、初めての戯曲「死に神が背中を触った」を書き、友人と二人で高校の階段の踊り場で上演した。1973年高校を卒業し「意気揚々とドロップアウトを宣言」した。1976年に「劇団洪洋社」を旗揚げしたが、経済的負担も厳しく3年で解散した。だが、石川裕人はそこで止まらなかった。劇団を再結成し、発展させていった。個人としての活動の幅も広がっていった。それらは「せんだい演劇工房10BOX」の設置に繋がった。さらに児童劇団への脚本提供、シニア劇団の設立や指導に携わるなど多岐に及んだ。2011年3月11日東日本大震災が発生、その1ヶ月半後には「夢トラック劇場」を岩手・宮城の沿岸部で上演した。翌12年震災をテーマとした「方丈の海」を上演、千秋楽の約1ヶ月後に急逝した。石川裕人という人が、なぜこれほど劇作と演劇を愛し続けられたのか。その場

風と歩こう

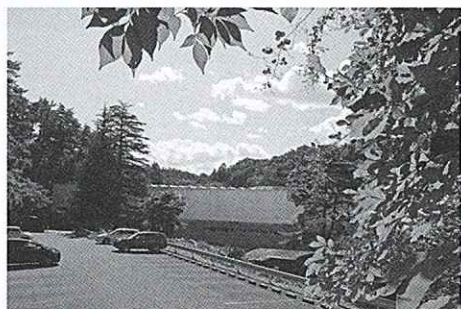


Photo by Ryuji Sasaki

線状降水帯のような大雨の仙台にあって「文学館は大丈夫ですか」遠方の知人からメールが入った。というの、天気の良い日に仙台文学館を初めて案内していたから。彼女は駐車場から建物を見て「うわっ、素晴らしい」と声高に叫んだ。正面玄関から入り一通り中を見て南側から外に出た。坂道を歩いて緑の空気を吸い、草原で腰を下ろした。しばらくぶりで会話ははずんだ。彼女は文学にも興味を示したが、どちらかというと自然と向き合うのが好きなのだ。もつと好きなのは建物を見ることがだ。谷底に建っていたように見えた文学館のところに雨が集中したらと危惧したらしい。私は少しも心配しなかったが後日時間の合間に行ってみた。

草原の真ん中で空を見あげた。今までになく青く、雲は高いところにあった。9月になっても気温は30度超え。これでは秋がないのではと懸念していた。だが蝉の声はいつの間にか虫の声に代わっているのに気づく。文学館周辺を吹く風もさわやかに感じる。(一)

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第73号をお届けします。

▽お茶会に誘われた。場所は仙台二中の隣にある六幽庵。いつもは慌ただしく会に出てそそくさと帰っていたのだが、少し早めに着いたので、初めてゆつくりと庭を散策した。庭のある日本の風景はいいものです。余裕の行動はいい事をもたらす。(一)

▽よく高速道路を走る友達が、最近道沿いの景色に異変あり、葛が影しく繁茂して、松が何本も茶色く立ち枯れしていると言った。先日、車で通りかかった博物館入り口の、姿の良い松が半分茶色くなっているのを見た。これも猛暑のせいかな、樹医等で救えないものかと思いがら帰ってきた。人間だけでなく大木にも過酷な夏だったのだと改めて思った。(近)

▽日中の一人言が減った。その代わりに会話が増えた。相手はワンコだ。表情や仕草で訴え、言葉をかけると反応してくれる。行ってきますにも、ただいまにも全身で感情を表現してくれる。他人には一人言と同じように見えても、そうではない。相手がいるというのは、いいものだと感じている。(和)

▽6回目のワクチン接種も済ませているのに、コロナウイルスに感染してしまった。高熱は出なかったものの、鼻の奥や喉の痛み、咳、頭痛、鼻水と通常の風邪の症状に加え、ひどい倦怠感が長く続く。口の中が苦く、食べ物美味しくないのも辛いことだった。コロナはまだまだ油断できない。難敵である。(佐)

文友一滴

図書雑誌を立ち読みして「カフカはなぜ自殺しなかったのか?」という本の題名を見たとき、この題はちょっと酷いなと思った。思い返せば、奇妙なことや腑に落ちないできごとや例えに「カフカの」とか「カフカの世界」とか、気楽に引用してきた自分だった。気にならなかって本を借りたら、表紙の横に「弱いかからこそわかること」とあり、自殺を考えている人が励まされそうなサブタイトル。主にカフカの「日記」や「手紙」の解説と考察、個人的なことから20世紀初頭のヨーロッパや激動の世界事情が浮かび上がって興味深かった。以前、雑誌にカフカは映画好きで、旅行先でみたチャップリンの映画のことを日記に書いたとあり、別世界の作家と思っていたカフカがぐつと近くなったことを感じたものだ。変人としてのカフカの逸話はいくつか読み知っていたが、改めて読むと変人どころか、現代の若者に通じる感覚をすでに持っていたことが分かる。彼は50年下のフェリックスという女性と、婚約しては解消する女性を繰り返した。手紙魔の彼、結婚に備え彼女が仕事を辞めようとしたとき、「どうか仕事を辞めないで欲しい」とほとんど懇願の手紙を出している。当時フェリックスは通信機器を扱う先端企業に勤める優秀なキャリアウーマンだった。婚約期間に二人で家具を見に行ったとき、カフカは「このことも」とく反対、疲れ切ったことが日記に書かれている。5年後辛抱強いフェリックスもついにあきらめて、二人は別れる。「死にたい……」と日記や手紙に綴りながら、作品を書き続けたカフカは41才で病死する。その特異な文学は後に起きるナチスの蛮行を予見していたといわれる。没後約一世紀を経て、いまでも読み解きが続く、一向に古びない理由が少し分かった気がした。(近)

# 特集「思い出の場所・思い出の風景」

特集「思い出の場所・思い出の風景」原稿募集に、多くの会員の皆さまから  
お寄せいただき、ありがとうございました。

遙かな記憶が色と音を伴ってふっと現れることは懐かしくもあり、うれしくもまた哀しくもあるもの。そんな自分だけの心に残る風景や思い出の場所の数々。とっておきの風景もあれば、心揺さぶられた唯一の場所もあり、忘れられない記憶と結びついたものもあります。

これから先に出会うであろう場所や風景も、いつかはかけがえのない思い出になって行くのでしょうか。

◆岩手の山村に育った私は、若い頃から都会にあこがれていました。24歳の時、念願がかなって、東京の電車を降りた時、ホームの階段を人々（主にサラリーマン風の人達？）が、一斉に走りながら昇っていくのを見て、とても驚きました。50年も昔の事ですが、当時はそれもめずらしくはなかったのです。モーター社員とよばれた人達の日常でした。（秋野桜子）  
◆職員旅行で男鹿半島を訪ねた。夕日が

れません。よろこびの子どもたちは笑顔あふれ、向山の松風の中に響きわたりました。あの丘に立ちたい。（浜野童風）  
◆数年前に伊豆沼の「はすまつり」に行った。その時に見た風景は生涯忘れられない。水玉が載っている大きな丸い葉と神々しく咲くピンク色の花で埋め尽くされた沼の中を小さな遊覧船はすべるように進む。あまりにも非日常的な景色に言葉が失った。極楽浄土とはこんな感じなのか？もしかして亡くなったあの人もこの中でふわふわ浮いているのではないかと想像して涙が出た。（星佐都子）  
◆北海道当別記念館の脇に、文人殿様伊達邦直の歌碑があります。あそ山のしげる木立をふみ分けて 住み見し月の今も替らず、かつて当別を訪れた時のこと、丁度神社のハルニレの花が開き始めた頃で、維新の動乱期、自らを律し立ち上がった主従の姿との対比に、強く胸うたれる思いがしました。通りに漂う貧しさの中の気品も心に深く残っています。旧城下町には越島南枝の碑があります。（三上壽）  
◆隣駅の地にあった小学校に汽車通学していた一年生の遠足の日、母の弁当づくりが間に合わなかったのか、私が持ち忘れたのか、遠足先の野山まで母が歩いて弁当を届けてくれたことがあります。その学校では一度きりだった遠足の場面は、あれから六十年以上経った今でも時々思い出し、用事でその辺りを通るときには、風景に目を凝らします。

沈む時刻に合わせて着いた半島の先端で「もう少しで太陽が海に入るぞ、その時ジュウツで音がするから聞き逃すなよ」誰かが言った。その瞬間が来た。夕日が海に入ったとたん、みんな「ジュウツ！」って大声を出し笑い転げた。そんな仲間たちとの仕事はとても楽しかった。あれから50年、初めて見た大きな大きな夕日。ジュウツ！の声と共に思い出す。（伊藤俊子）

◆私の生れは東京都と千葉県の間を流れる江戸川の辺、その昔は宿場町で、歌謡曲で有名な「矢切の渡し」が今でもある松戸という所である。河川敷に広がる葱畑をいくと伊藤佐千夫の「野菊の墓」の碑があり、その近くの渡し場から、これもまた映画でお馴染みの寅さんの「柴又」へ十分位で渡ることが出来る。幼い日春になるとレンゲを摘みつつ、うなぎならぬだんごを食べに家族で通った思い出の場所である。（小原嘉子）

◆アウシユウィツツ、ポーランドの正式名はオシフイエンナム。ユダヤ人名は今がダム底の故郷での出来事です。（山下一）

◆学生の頃、私はまだとても若くて独りでとても寂しくて、アパートの小さな部屋で降りしきる雪を見ていた。昼下がりで思ったと思う。ジムホールのアランフェス協奏曲を聞いていた。切なくて甘い。私は知らなかった。震災の夜の無音の闇に沈んでいく冷たい雪のことも、午前0時すぎの夫の眠る救急病院の前で狂ったように吹雪く白い雪のこともー私は知らなかった。私はとても若かったのだ。（IKU）

◆私の生家は石巻の日和山にある。どこへ行くのも坂を下り、帰りは坂をのぼる。なにか欲しい物があると坂を下り、下の商店街まで出かけた。途中知り合いに会い「どこへ？」と聞かれると「下まで」と答えた。末子の私は母が買物に行く時はいつも連れていかれた。冬は母のカクマキの中に入り、夏の暑い日はキャンデーをなめながら帰った。舗装されていない山道は風が吹くと土ぼこりが舞上がった。（K・T）

◆みんなが笑顔である。夫の母がいる、兄夫婦がいる、幼い甥や姪がいる、同じ町内に住む姉たちもいる。穏やかな空気が流れるそこは、夫になる人の実家の庭であった。初めて夫の家族に紹介された日、コチに緊張していた私を温かく迎えてくれたその時の思い出は、60年を経ても鮮

行きました。その数ヶ月後、再び駅へ。しかし今度は誰もが沈黙して並ぶだけ。列車が着くと、降りてきたのは白布に包まれたいくつもの箱でした。今でも前沢駅に立つと、その日が甦ってきます。（佐藤通雅）

◆60年以上も前になろうか。連なる店の前に、ひさしが細長く伸び、その下を母親と一緒に歩いたことがある。青森県黒石市に在り、「こみせ通り」と呼ばれている。夏の陽ざし、積雪などから通行人を守ってくれている。この春、訪れた。歩を進めるほどに、あのときの若い母親の姿が浮かび、何かほんわりしたものが胸にこみ上げてきた。ふと思う。私の表情はどんなふうだったのだろうか、と。（其田敏美）

◆どなたも心に残る故郷の原風景を持っている。改めて思い出すこともないが何時でも懐かしく消えることはない。50年以上も昔の子供の頃の思いが埋もれている。私だけの宝物だ。茨城県の最南端取手市と千葉県の境に流れる坂東太郎（利根川のこと）は、流域の広い河で流れは堤防から見えない。幼い頃、河原で「かくれんぼ」や「追いかけっこ」をした記憶が心に残る。（豊島光喜）

◆昭和45年5月5日、おてんとさんの詩碑が、仲間たちが中心となって建立されました。「おてんとさんありがとう」と唄った日が昨日のようで、いつまでも忘れられた離島の佐渡です。（S・S）

一人旅が好きです。年齢や回数によっても印象がちがってくると思います。私の思い出の場所は、トキを見にいった離島の佐渡です。（S・S）



## 第59回読書会 虚実の被膜、女と男と女の物語

井上荒野『あちらにいる鬼』

新しい恋のために夫を捨て娘を捨て家を捨てた女は、更に別の恋へ、次の恋へと移って行く。奔放な恋に生きた女は、やがて尼僧となつた。作品は女の最後の恋の相手となった男の、長女によって書かれた実在の人物の物語である。夫の裏切りを知りながらそれを許していた美しい母親と、何年にも及ぶ父親との関係が続けた作家の女。それぞれの想いをふたりに語らせるスタイルを取ることで、物語は激しい衝突なしに複雑な愛憎の様相を描き出している。

\*不倫小説ではあるが、物語の仕掛けが上手く嫌な感じがしなかった。  
\*寂光は捨てる人だったのか。妻は本当に強かったのか。  
\*「私」という一人称の語り口が変わった書き方だと思った。  
\*寂光の恋は、バリアフリーだったのだろうか。  
また言葉の多様さや、リアリティのある書き方など、作者の力量を感じた人も多かった。  
10月11日 新会員を迎えて11名出席。（佐）

次回読書会は12月13日（水）14時 村上春樹「螢」新潮文庫「螢・納屋を焼く」その他の短編所収  
※友の会会員は自由に参加できます。申込みは友の会事務局まで。